

烏森トレッキング回想記

第十五回

日 程：‘05. 11. 26 (土) ~ 11. 27 (日)

行 程：1日目 武蔵五日市駅～浅間尾根／峠の茶店～浅間嶺～人里峠～一本松（一本杉）～数馬分岐～ 泊／民宿「浅間坂」
2日目 宿～都民の森～鞘口峠～三頭山東峰・中央峰～笹尾根～三頭大滝～都民の森～武蔵五日市駅

メンバー：山田、小林、森、磯崎

南房総／東京湾、真鶴岬／相模湾と海浜近くの山歩きが続いた後、今回は久しぶりに奥多摩に戻り、晩秋の尾根歩き。

【余談44】当初は、“奥多摩の紅葉狩り”を・テーマに、久しぶりの、御岳山、「登奈利荘」再訪を予定し、記録的な残暑が続いていることから、紅葉の盛りは例年の2週間遅れと伝えられたため、訪問時期を11月末に設定した。

ところが、11月に入ると、急に冷え込みが厳しくなり、“紅葉前線”が一挙に移動、急遽、案内を、“落葉の道を踏みしめて”に変更した。

今回の参加者は、最少人数の4名。

会頭は体調整備、米本氏は社内旅行、大谷氏は社内会議と、それぞれの事情で欠席し、更に、吉川氏も急な所用が入り、直前に不参加となる。

集合地は、武蔵五日市線のターミナル／武蔵五日市駅で、待合わせ時間は、前回より30分早めて、8：50AM。

例によって、土曜日の駅前バス・ターミナルは、ハイカーで溢れ返る人の波となるが、大きく手を振り、互いの居場所を知らせ合って、全員、遅れることなく、無事集合。

メンバーに、吉川氏の急な欠席を伝えると共に、未定で案内した初日の訪問先を、候補地をリストアップしてアンケート。

結果は、“このメンバーなら、ひよっとすると”、と予感した、最もハードな「三頭山（1,531m）登山」が満票確保！

因みに他のコースは、本命と予想した、「飯盒炊さん」＋「陶器、和紙の制作教室」、穴は、「三頭山山麓散策から宿迄の尾根歩き」や、「里山、紅葉巡り」と、いずれもお茶を濁すもの。

メンバーの意を受け、大幅に行程変更。(計画通りに行動した回が、あったかいな！)

初日は、当初、2日目に予定していた、「浅間尾根歩き(但し、下りから上りの逆歩き)」とし、2日目は、宿から近い、「三頭山登山」とガラガラ、ポーン！

勇躍、全員揃って、昼の弁当と夜の酒を調達に、駅前コンビニに向かう。

バス・ターミナルに戻ると、9時前後に集中した便が一段落したためか、人の波は引いた後。

上機嫌なバス案内人から、“「払沢の滝」方面のバスは、間もなく到着だよ”、とガイドされるも、「時坂(とっさか)峠」への嫌な登り道を頭に浮かべ、更には、“**奥多摩地区のバスとタクシー料金の見合いは4名**”の格言を思いだし、タクシー移動を決断。

無愛想なタクシー運転手は、“**ザックは後ろのトランクに**”、と邪慳に指示するが、行き先を告げた途端に態度を豹変、破顔一笑、揉手も厭わんばかりにドアを飛び出す！

向かう先は、瀬戸沢林道の終着地、「峠の茶店」。

弁舌爽やかな運転手に、今年の、紅葉の盛り時期を尋ねると、“1週間位前かねえ”、とあっけらかんに云い、山麓周辺か、町中辺りかと問うとすると、“今年、雨が少なかったから、色付きが良くなかったねえ”、と強烈パンチを喰らい、会話を打切り黙り込む。

その後は、さっきの呪文を、早、忘れ、一人当たりのバス料金を4掛けしながら、料金メーターと睨めっこ。

払沢の滝入口脇から浅間尾根への林道に進入し、急坂の広い舗装路を葛に上ると、間無く、谷間に数軒の民家が寄り添う時坂集落。

以前、ゼイゼイ云いながら、この道を登っていた時、洗濯物籠を抱えた老婆が、道の先を足腰しっかりと歩いていたことを思い出し、つい苦笑。

更に高度を上げると、葛の道から、時折、遠くの展望が開け、御前山の支稜山斜面に、見事な紅葉、黄葉の綾取りを眺望する。

舗装路の痛みが目立ち始める頃には、徐々に道幅も狭まばり、所々で、垂れ下がる樹々の枝が車体を擦り始めるが、なお、記憶に無い道中路。

浅間尾根上、「峠の茶店」には、約30分で到着。

尾根に取り付いてからの距離が意外に長く感じられたが、それでも通常のバス利用だと、駅から2時間は掛かると思われ、**料金比較はともかく、大幅な時間稼ぎと弁明する。**

「峠の茶店」は木の香豊かな休憩所。

営業努力も充分で、至る所に案内看板を掲げ、山菜料理や麺類、更には名物団子も準備

し、下って来たハイカーの休息を誘う。

ただ、偶然なるかな、未だ利用客を見掛けたことが無く、内部の様子は定かで無し！

北面の展望が見事に開け、奥多摩三山（大岳山、三頭山、御前山）揃い踏み。柔らかな晩秋の朝陽に照らされ、ここでも紅葉斑に輝く。

メンバーに、現在は撤去されたが、以前、野趣豊かなドラム缶風呂が据えられていたと昔のことを語りながら、脚元が朽ちた木ベンチに荷を降ろして身支度する。

いざや出発、これより先は土の道！

小橋で、「瀬戸沢」の源流を渡り、「瀬戸沢の一軒家」を覗いた後、沢沿いの道を辿ると、間無く、「飲料用」と木札をブラ下げた「小沢の水場」。

早、歩きを止め、各自の水筒を、「払沢の滝」の上流水で、満タンにする。

岩場の急坂から、歩きを再開。

高度を上げるに連れ、流れの水勢細り、終いには消失。伏流したものと思われるが、渓谷は岩と倒木だらけの、見るも無惨な崩壊の谷と化す。

沢を離れた登山道は、やがて谷を大きく巻き、尾根の北側山腹にからむ頃には、杉の林が広葉樹の森に一変。

彩色を残す樹々の回廊を潜りながら、落葉の絨毯をザック、ザックと踏みしめ、“どうだ、どうだ”、とばかりに腰を振って、後ろのメンバーに自慢する。

所々で、北面の展望が開かれ、都度立ち止まっては、「大岳山」、「御前山」の山容に眺め入る。

トイレ施設もある「浅間嶺休憩所」から、最後の小急坂を登り、昼食予定地の「浅間嶺」に到着。

初めて南面の展望が開け、眼前には、「三頭山」から張り出す「笹尾根」が横たわり、その奥には、「丹沢山塊」の峰々が重なり合う。

そして、視線を、右手、遙か彼方上空に移すと、早、雲がたなびき、霞に包まれ始めた「富士山」が、天空に浮かぶが如く雲上に頭を出す。

嶺頂周辺には、なお、秋色充分に残し、富士を撮るアングルに、穂を揺らすススキをアレンジする。

とは云うものの、嶺の標柱脇に立つ「桜樹」は、すっかり葉を落として裸木化、風に飛ばされたか、つい先日、樹下周辺に拾い集めた桜葉は、一切不見当。

食事場所にと目論んでいた木テーブルでは、早、1組の年配カップルが休憩中。

相席を願い出る勇氣はなく、やむなく、隣の木ベンチ2本に荷を降ろし、食事の準備に取り掛かる。

今回は、小林氏が、懐かしい石油バーナー式火器を持参し、森氏の分と合わせて火器3式の悠々湯沸かし。

火を止めて、味噌汁に湯を注ぐ頃には、2方向からハイカー達が続々到着し、間無く、山上至る所で湯沸かし音が響き渡る。

寒気を感じる頃、やや長目の食事を終え、嶺を下って、緑の回廊歩きを再開。

再び、冗談を言い合ったり、大きく深呼吸したり、はたまた、前に走って写真を撮ったりと、大忙し！

“へんぼり”、あるいは、“へんぼり”、とも読む、「人里分岐」を過ぎると、周囲は、打って変わって、針葉樹の森に一変し、登山道からは落葉が消失。

今度は、鬱蒼とした樹々の繁りから洩れる陽の陰影を楽しみながら、木の根を露出し、乾いたり湿ったりの土道を踏み、静寂の山中に笑い声を響かす。

やがて、登山道は、尾根の背に近づいたか、北面を巻いたり、南面を巻いたりと移動し始め、再び、展望を取り戻す。

途中、「一本松（一本杉）」で一服し、その先の大岩では、案内板に記された「猿の手形」を皆なで探す。

数馬分岐に到着し、また休憩。

脚の朽ちた木ベンチに荷を降ろし、知床／羅臼産の昆布茶を飲みながら、“杉が植樹される前、ここは谷を見下ろす好展望の傾斜地であったのに…”、とメンバーに愚痴を云い、なお、背丈2mに達しない杉の樹間から、植樹中、山腹に造作されていた材料小屋を探す。

若干、早過ぎると思いながらも、メンバーの強い要望（督促）を受け、今日の宿へと立ち上がり、「藤原峠」、「風張峠」への尾根道を右手に見送り、南西方向への坂道を下る。

南面山麓の展望が開け始めると、右手遙か遠くの山中腹に、門構えが立派な、大きな一軒家を発見し、**ついお節介に、足の・は如何と、バス道間に車道を探す。**

林道を横断し、更に、道をジグザグ下ると、畑地や墓地、民家が現れ始め、すっかり山里風景。

石垣脇に根を張り、柘榴色に紅葉した「紫陽花」に、しばし足を止め、「民宿 浅間坂」の入り口では、午後の陽を浴び、紅に輝く「紅葉」の大樹に見入る。

「民宿 浅間坂」は、旧館、新館、ロッジを構える大型旅館。

「こんにゃく料理」を目玉とするも、その一方で、「クラシック・コンサート」を定期開催したりと趣向を凝らし、御岳の「御師の講宿」とはひと味異相。

真の自慢は、何と云っても、旧館前に造作された大テラス。

眼前には、浅間尾根より一段高い笹尾根が横たわり、ガーデン風に造作されたテラス周辺には、季節の花々ばかりか、「柿」や「柚子」が負けじとばかりに秋色に輝やく。

【余談45】「民宿 浅間坂」の存在は、「浅間尾根縦走路」の取り付き途中に立地することから、以前から承知していた。

早朝、最寄りのバス停、「浅間尾根登山口」に下車すると、同宿向けに宛名書きされ、ナイロン袋に包装された朝刊が、待合い室木ベンチに置かれているのが良く目撃される。

もちろん、配達人は多摩バス（旧西東京バス）運転手で、バス停毎に見事なコントロールで投げ放つ。

宿迄は、急坂を歩いて約20分。

何度か、向かい序でに届けてあげようかと思ったが、生活リズムを崩してしまうのではと実行したことはない。

今回、宿泊先に選んだのは、「浅間尾根縦走」に至便であることは無論、決め手は、パンフ入手に事前に立ち寄った際、応接した2名の女性に素朴さが感じられたためである。

（案内パンフから・1名は弘子ばあちゃんと判明し、もう一方の中年女性は若女将であった）

部屋は新館、「山海堂」。

崖上に造られた二階家二階部一室で、一階は、入浴だけでも利用可能な、当宿ご自慢施設、“数馬浅間の湯”。

「檜」と「岩」の両風呂を併設し、男女交互に日替わりユース。

風呂に眼のない山田氏は、荷を降ろすや否や、嗅覚鋭く、直ぐに階下へ。

カメラ片手に、なお明るいテラスに出、軒下に吊された「剥き柿」や、木テーブル上に干された「蔦の蔓」や、「椎茸」の干物を観たり触ったりし、しばし時を過ごす。

眼下には、「浅間尾根」と「笹尾根」の間を縫う様に延びる檜原街道が見え隠れし、**水澄ましの様に走る普通車の後を、鯀の様な多摩バス（旧西東京バス）が追い掛ける。**

帳場に行き、若女将に夕食時間を確認すると共に、翌日の昼食用に、「おにぎり弁当」を注文と、雑務処理。

「都民の森」行バスの時刻を訊くと、何と、“お送りしましょうか”、との嬉しい返事。

その上、竹籠に盛られた柚子迄貰い、**玄関を出るや否や、思わず、部屋までスキップ、スキップ!**

夕食は、玄関横の大広間。

所狭しと大小5組の宴席が整えられ、着席する顔ぶれは、マウンテンバイクでツーリングする若い男性5人連れ、若いカップルと、従来宿に比し、若干、異質なメンバー構成。

それでも卓上に並べられた料理は、案内通り、「鮎の塩焼き」をメインディッシュに、小鉢に盛られた「山の幸」ふんだんで、“ヘルシー、ヘルシー”と舌鼓。

翌早朝、静寂に包まれたテラスに立ち、深呼吸。

朝の冷気によるものか、木床、木テーブル、木ベンチ共、霜に覆われ、脚元は、誠に覺つかなく、眼前の笹尾根が朝陽に照らされ光輝き、ピークを造る「大羽根山」の北斜面に、紅葉斑に浮かぶのと好対照。

ベンチの霜を拭き、森氏が、傍らの木テーブル上で炒れてくれたドリップ・コーヒーを喫み、珠玉の時間を楽しむ。

いつのまにか、鳥達の囀り声も加わり、“お山の朝”の始まり、始まり!

そうこうする内、朝風呂（本日は岩風呂）から上がった山田氏と、宿の亭主で、風呂の制作者でもある小林中氏も加わり、園芸談議。

同氏の本業は、都庁登録の建築工事業者で、子息は現在、神奈川／藤沢市で大工業を修業中の由と云うことから、会話も弾む。

朝食後、小林社長に送られ都民の森へ。

つい最近、石原都知事が視察に訪れ、改めて自然保護の重要性を認識すると共に、引き続き保全に全力を尽くすと約束し、「三頭大滝」まで歩いた由。

木材工芸センター横の「丸太切り場」で汲水し、山田氏と丸太杉の早挽き競争。

あ〜あ、何とも悲惨!、所要時間ダブルスコアの完敗で、鈍りきった腕を振り振り、3ヶ目の「木製置台」を確保し、ザックに終う。

登山コースは、最もポピュラーな鞆口峠（1, 142m）越えを選ぶが、取り付き急な本道、だらだら坂を回避し、炭焼窯側の迂回路から登る。

道の周辺には、早、ハイカーの声が響きわたり、本日も人盛況の予感あり。

鞆口峠で一休み。左手前方には、見上げるだけでも嫌になる急峻の木階段。

つつい出発をためらい、四方山話をしながら、氣息を整えるが、痺れを切らしたメン

バーに急かされ、止む無く立ち上がる。

道は、急なばかりか、途中からは足場が確保し辛い固土坂。

慎重に歩を進めると、後に続くメンバーは焦れ気味で、一旦道を譲るや、いつの間にか遙か先をホイホイ登る。

一緒に登る親子4人の楽しい会話。

父親、“おーい急に黙り込んで、さっきまでの元気はどうしたい？”

息子、“違うよ、皆が話したくなさそうだから、黙ってやっているだけだよ”

つい微笑みながら、前方見上げるや、いつの間にやら、メンバーの姿が消失。

“何を勘違いしている。リーダーを追払らかしてどう云うつもりだ！”

三頭山はブナ林の山。

すっかり葉を落とし、冬枯れ模様の「ブナの路」を、“言葉少なに、ただ一人”。

途中、旧登山道との分岐に出合い、北西側奥多摩湖の展望を求め、「ブナの路」を離れて西側尾根道に入る。若干荒れてはいるが、人が少なく、樹間の所々から藍色の湖面が見え隠れする静かな道。

尾根の本道と合流し、木ベンチに座り汗を拭く。

“あれれっ、向こうから登ってくるのは烏隊。その後ろに続くは、例の親子四人連れ！”
不満そうな様子と、罰の悪そうな顔色が入り混じり、早速、事情を質すや、“分岐路の先で、しばらく待っていたが、いつまで経っても来ないので…”と言葉を濁す。

そうか、そうか、正体見たり枯れ尾花！ 終に見限られたか、くわばら、くわばら！

その後は、“さあ、さあ、どうぞ”、と先頭に追いやられ、尻を押され押されし、急坂を這い登る。

見晴らし小屋に立ち寄った後、「白樺の木」が絵になる展望台で休み、最後、三角点を置く東峰から最高峰の西峰に登り、無事、烏森会登山の最高峰、「三頭山」に立つ。

(「三頭山」の語源は、「御堂山」の様であるが、何故かメンバーは、「みとうさん」を「みずさん」と読む)

南面に正対する富士は、早、霞に包まれ、浮城のように、見せる部分は頭部の大きな山容のみ。

それでも、続々と到着するハイカーは、“富士山、富士山”と歓喜の声。

富士を観るには、最高のビュー・ポイントとなる南側木ベンチに荷を降ろし、味噌汁用の湯を沸かす。

宿で調達した昼食弁当を開き、“おにぎり3個は多すぎる”とか、“漬物付かずは非常識”と、さっきの謝意を忘れて、早、文句を云う。

食後のコーヒーを楽しみ、しばし一服。

展望明瞭な北面に回り、据え付けられた銅製の案内板を指さしながら、奥多摩三山（御岳山、大岳山、御前山）の、更に北奥に位置する石尾根を北西に辿り、頭をちょこんと出した峰に、あれが「雲取山」と山名を追う。

下山前、山標背景に全員の笑顔を撮影。

急坂の笹尾根を少し南東に下り、途中、三頭沢への岩場道に入り、沢沿いに三頭大滝へと下る。

谷間の樹々は冬枯れ模様ですっかり裸木化し、踏みしめる落葉も谷風に飛ばされたか、量が少なく黒墨み濡れる。転倒に注意しながら、慎重に下山。

三頭大滝の紅葉も終わった後で、木テーブルに荷を降ろすこともなく、都民の森入口へと木屑の道を下る。

登る前とは別の水場で、ポリタン、予備水筒を満杯にし、森の入口で、「檜原柿」を購入していると、先行したメンバーが、“バスが出るぞ”、と迎えに来る。